

平成29年度兵庫自治学会研究発表大会

基調講演要旨

開催日：平成29年12月10日（日）

場所：兵庫県立大学 神戸商科キャンパス

基調講演：「新しいひろばをつくる ―賢治の祈り、東北の祈り―」

講師：平田 オリザ（劇作家・演出家）

1. はじめに

私の本業は劇作家・演出家で、作品を作って皆さんにお届けすることが一番の仕事であり、政策が専門ではありません。ですので、今日の話は午後からの発表の前座として、余興程度に聞いていただきたいと思います。

今回、自己紹介のスライドを持ってきました。「その河をこえて、五月」は、2002年日韓共催ワールドカップの記念事業として作った現代劇です。日本の俳優6人と韓国の俳優5人に出させていただきました。日本からは三田和代さんら、韓国からはベク・ソンヒ先生という人間国宝クラスの俳優さんに出いただき、日韓両国で大きな演劇賞を頂きました。神戸でも上演したのでご覧いただいた方もいらっしゃるかもしれません。

「東京ノート」は私の代表作で、現在14カ国語ぐらいに翻訳され、世界中で上演していただいているのですが、その日韓版です。手前の2人は韓国の俳優で、奥の2人は日本の俳優です。今年は台湾版、タイ版を作りました。世界中でこういった仕事をしています。

「ユートピア」は、日本とイランとフランスの3カ国合同で、フランスの国立劇場で作った作品です。こういった仕事の本業です。

もう一つの本業として、大阪大学の教員を務めています。それ以外に国語の教科書を作る仕事をずっとして、今も1年に30～40校ぐらいは小中学校で演劇の授業をします。豊岡市や宝塚市などでは年間10校ぐらいは小学校で実際に授業をしています。

今日はそういう話ではなく、文化政策についての話をしたいと思うのですが、この学会自体が神



戸の震災直前につくられたと伺いました。私は昨日、一昨日と豊岡にいて、3日前までは福島にいたのですが、東北の復興のお手伝いもさせていただいているので、少し東北の話、神戸の震災の話、あるいは豊岡も震災を経験した街なので、そういったところに沿いながら話を進めていきたいと思っています。

2. 宮沢賢治の農民芸術概論綱要

最初に持ってきたのは、宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』です。宮沢賢治は、花巻農学校の教員を退職した後、羅須地人協会という、現在の協同組合のような組織を設立し、昼は農作業、夜は農民が音楽や演劇を楽しんだりエスペラント語を学んだり、哲学の議論をしたりする場をつくりました。そのとき、なぜこれからは農民が芸術を楽しまなければならないのかを書き記したのが、『農民芸術概論綱要』です。そこにはこう書いてあります。「職業芸術家は一度亡びねばならぬ。誰もみな芸術家たる感受をなせ。個性の優れる方面に於て各々止むなき表現をなせ。然もめいめいそのときどきの芸術家である」。

これからは、農民一人一人が芸術的な感性を持っていなければならないということを、約100年前の1920年代に書いているわけです。ではなぜ、宮沢賢治はこういうことを考えたのだろうかということ、今日を少し考えていきたいと思えます。

3. 文化の力

私は、大学でアートマネジメントという、社会における芸術の役割を説明するような授業を主に担当しています。芸術の役割は三つぐらいに分けて考えるといいと思います。芸術そのものの役割としては、人々の心を慰めたり励ましたり勇気付けたりすることです。これは皆さん経験していると思います。それから、コミュニティ形成維持の役割です。どんな文化人類学者に聞いても、どんな未開の集落に行っても、演劇やダンスや芸能はあるわけです。これは、人類が人類になったあたりから既に始まっているのではないかとわれています。

例えば宮城県女川町は、震災被害が最も大きかった地域です。小さな入り江がたくさんあるので、40mもの津波が来たからです。ここも高台移転するしかないのですが、小さな港の集合体であるため、合意形成が難航しました。女川町は獅子舞が有名な地域なのですが、獅子舞の獅子頭も全て流されてしまいました。ただ、獅子舞の復興は早かったのです。募金もたくさん集まりましたし、獅子頭自体を送ってくださった自治体もありました。獅子舞のお祭りは普段ゴールデンウィークごろにあるのですが、3月の発災から間もないため、その年の4～5月はできませんでした。

しかし、夏から秋に復活していくのですが、面白いことに獅子舞が復活した地域から高台移転の合意形成ができていくのです。要するに人間は面白いもので、経済の話だけしていても、もっと広い土地でとか、平らな土地でなどいろいろ言うのですが、何十年、何百年続けてきた祭りを一度復活させるだけで、「いろいろあるけど、やっぱりみんなに移るべ」となったわけです。これが、目に見えない文化の力、ある意味失ってみないと分からない文化の力ではないかと思えます。

4. 演劇情動療法

社会包摂は最近出てきた概念ですが、今のご時勢、文化による社会包摂が教育や観光に役立つことがあります。それから、福祉や医療の分野では、

認知症予防や治療に演劇やダンスがものすごく使われているのです。東北大医学部の藤井昌彦先生が研究なさっている方法に演劇情動療法があるのですが、ある病院が全面的に取り入れたところ、薬の使用量が半分から3分の1までに減ったというエビデンスも出ています。

どういうことかということ、認知症は新皮質という新しい脳の領域が衰える疾患です。新皮質では記憶や計算をつかさどっています。しかし、真ん中の大脳辺縁系という情動や感情をつかさどる部分は衰えていないことが分かってきました。衰えていないどころか、脳はある部分が衰えると他が補う要素を持っているので、大脳辺縁系は活性化しているのではないかということです。だから、認知症の人は怒りっぽい分、喜ぶ力も増えているという考え方です。よく認知症のおばあちゃんが財布を広げて、「1万円札がない！ あんた、盗んだでしょう」と言いますよね。今までなら、新皮質に訴えて「おばあちゃん、盗んでいませんよ。こっちに忘れたんじゃないの」「最初から入ってなかったんじゃないの」と論理的に言うと、ますます怒っていたわけです。

演劇情動療法の場合はどうするかということ、一緒に驚いてあげるのです。「え？ 1万円札ないの？ 大変だね」と、俳優が演劇のワークショップを受けた介護士が演技するのです。俳優ですから演技をするのはへっちゃらです。一緒に驚いてあげて、一生懸命探します。15分も探すと、おばあちゃんはだんだん疲れてきますから、「ないね、どうしよう。じゃあ、お茶でも飲もうか。お茶飲んだら、もう一回探すからね」とお茶を飲むと、おばあちゃんは大体その話を忘れてしまいます。どちらにもストレスがたまりません。

今、在宅介護の家族の方などにも演劇のワークショップを受けていただいて、お互い楽しく介護することで、ストレスをできるだけ軽減しています。実際、認知症の方に処方される薬の半分以上は精神安定系なのです。だから、落ち着けばその薬は要らなくなり、高齢者医療費も相当削減されます。こういったところにも演劇やアートが使われ始めています。

私がかかわっている豊岡市は、教育や観光への活用に重点を置いています。今日は自治学会ですから、公的なお金を使った文化政策を考える場合には、限られた予算をバランスよく使うことが重要になります。いくら創造活動が大事だといっても、

5000人の村で5億円のオペラを作っていたら、税金の無駄使いと言われます。しかし、観光保護政策と似ていて、どんな小さな村や町でも、少しはやらなければならないわけです。こういうものをバランスよく、町の伝統や実情に合った形で取り組むのが文化政策だと考えられています。

5. 無意識のセーフティネット

私は、この大会が終わると大阪へ行って、久しぶりに東京に帰るのですが、また来週は関西に戻ってきます。大阪大学の教員なので毎週来ているのですが、そういう生活を20年ぐらい続けてきました。全国を回る中で非常に感じるのは、地方都市の風景が非常に画一化してきたということです。中心部を国道が走っていて、周りにバイパスがあって、郊外型のショッピングセンターがあって、旧市街地はどんどん寂れています。これはどの自治体も抱えている深刻な問題だと思います。

私は1979年に初めてアメリカに行ったのですが、1970年代末のアメリカの風景に非常によく似てきたと思います。白人中産階級は、車でショッピングセンターに行って帰ってくるだけです。中心市街地はスラム化して昼間でも寄り付けません。完全にコミュニティが寸断されている時代でした。日本はここまでひどくはなっていませんが、実際には空き家や空き店舗の問題が起きています。空き家にホームレスが住み着いてしまったり、ごみ屋敷の問題もあります。完全にコミュニティから隔絶してしまった住民が出てきたり、スラム化の一手手前まで日本も来ているのです。

ただ、若い方にはちょっと想像できないと思うのですが、これはこの20～30年で急速に確立された風景であり、ずっと昔からあった風景ではないわけです。要するに、バブル前後から今に至る段階で、消費社会と金融経済が一拳に日本全国に広がったのです。これは良い面もあります。どんなに地方の人でも、安くて良い製品をいつでも手に入れることができるようになりました。それは素晴らしいことですが、利便性を追求するあまり、私たちは失ってしまったものもあると思うのです。

それは何かというと、旧市街地が持っていた経済活動からすれば一見無駄に見えるけれども、社会にとって必要な機能だと思います。抽象的などころで言いますと、「となりのトトロ」に出てくるような鎮守の森といった空間や、先ほどの女川の例のように、神話や伝統芸能、祭りのような時間

や空間を失ってしまったのではないかと思います。

具体的には、商店街が寂れていくと最初になくなるのが床屋と銭湯だといわれています。浮世床、浮世風呂という言葉は何となくお聞きになったことがあると思うのですが、これは江戸時代の滑稽本の題名です。要するに床屋や銭湯は江戸時代以来のコミュニティスペースであり、人が集まる場所だったのです。

私は東京生まれの東京育ちで、駒場という小さな商店街で育ちました。今もそこで暮らしていて、2軒隣が床屋なのです。2軒隣が床屋だと、絶対にそこでしか髪を切れません。髪は切ったことがばれてしまいます。向かいが電気屋なのですが、電気屋は大型テレビなどを量販店で買ってきて夜中にこっそり搬入できますが、床屋は毎朝会いますから無理ですよ。僕はどんなに忙しくても1カ月に1回はそこを予約して髪を切るのです。予約を取るような床屋ではないのですが、その代わり朝9時半開店のところを9時から開けてくれたり、夜7時半ぐらいまで待っていてくれたりします。商店街の付き合いというのは、面倒臭いのです。しかし、行くと得がたい情報も得られます。「あそこの夫婦はちょっと危ないらしいですよ」とか「あそこは相続税が払えなくて引っ越すみたいですよ」というふうに、個人情報など全く保護されていないので、そんなことを聞いていいのかというぐらいです。

一定年齢以上の方は思い出していただけると思うのですが、昔の床屋は髪を切っている人の横で子どもがずっと漫画を読んでいて、その横で、いつ仕事をしているのだろうというおじさんたちが将棋を指したりしていましたよね。このおじさんたちは経済活動からすると、明らかに無駄な存在です。店番をサボって将棋を指しに来ているわけですから。でも、このおじさんたちが子どもたちの監視係であり、教育係の役割を果たしていたのです。普段元気な子が落ち込んでいたら、「どうしたんだ。学校で嫌なことあったのか」と、そういうところからいじめが発見されたり、自然な機能があったわけです。

あるいは子どもが10円玉を握り締めて駄菓子屋へ買いに行くわけですが、ある日、1万円札で買いに行ったら駄菓子屋のおばさんは注意するわけです。子どもに直接言わなくても、「おたくのお子さん、1万円札で買いに来たわよ。景気いいわね」と嫌味混じりに報告します。今はどの自治体でも

犬の散歩を子どもの通学時間帯に合わせてもらうような見守り運動をしていますよね。しかし、そんなことはかつての商店街であれば、する必要がなかったのです。私などは商店街の子どもですから、人の家に預けられるのは普通のことでした。

これを僕は「無意識のセーフティネット」と呼んできました。この無意識のセーフティネットが壊れてしまったのではないかということです。ただし今日の話は、「だから昔に帰りましょう」ではなく、「ではどうしましょう」ということです。これが壊れてしまったのであれば、補完するものとして何か考えていかなければならないのではないかということです。

6. 無駄を許容できなくなった地方都市

まず皆さんに覚えておいていただきたいのは、こういった市場原理は辺境、末端ほど荒々しく働きます。例えば私は20年ほど前、沖縄県の与那国島に1カ月滞在して作品を作る仕事をしました。こういうのをアーティスト・イン・レジデンスといいます。先ほどご紹介にあった城崎国際アートセンターは、演劇やダンスのアーティスト・イン・レジデンスに特化した、世界でも非常に珍しい施設として成功しました、その走りのような仕事を20年前からしてきました。

与那国島は東京まで2000km、台湾まで120kmという日本の西端の島です。与那国島には本屋がありません。雑貨屋に漫画は置いてあるのですが、「ジャンプ」や「マガジン」など絶対に売れる本しか置いていないのです。「週刊文春」さえ置いていないのです。本を買おうと思うと、飛行機に40分乗って石垣島まで行かなければなりません。でも、僕の本は石垣島にも置いていないのです。僕の本を買おうと思うと、さらに1時間、飛行機に乗って那覇まで行かなければいけません。今は直行便があるのですが、当時はなかったので、石垣島経由でした。

与那国の人は僕の本を読まないでいいと言われてそれまでですが、そうではないから私たちは全国に三千数百の公立図書館を造ってきたわけです。本を読むことは、憲法で定められた「健康で文化的な最低限度の生活」に資するものなので、行政が保証します。逆にそれがなくて、市場原理だけになると、末端、辺境ほど売れるものしか置かなくなってしまいます。在庫と流通のコストが一層かかりますから、市場原理だけならば一見無

駄に見えるものは全て排除されてしまうわけです。

ここに私たちは幻想があったと思うのです。私たちは、地方は経済的には苦しいかもしれないけれども精神的には豊かで暮らしやすいのだと考えていました。そうだったかもしれませんが、しかし、そこに市場原理が入ってくると、免疫のないところにインフルエンザが入ってくるようなもので、根絶やしになってしまうのです。私たちまちづくりの業界では、イオンは無邪気に出店し、無邪気に撤退するという言葉があります。十数年で撤退するケースはたくさんあります。最短で3年で撤退したケースがあるのです。

私の母方のふるさは秋田の大館なのですが、東北はJRの駅と繁華街が少し離れているのです。仙台も盛岡もそうですが、大館もそうなのです。駅と商店街が離れているのですが、大館の場合、イオンが商店街と駅の真ん中にできてしまったのです。商店街は壊滅し、イオンは撤退しました。もうぺんぺん草も生えない状態です。でも、イオンに悪気はないのです。イオンは通行量調査に基づいて出店して、売り上げが減ったら撤退します。統計で出店して統計で撤退していくのです。なぜこんなにイオンの肩を持つかということ、2年前に私の小説が映画化されて、そのスポンサーがイオンモールだったのです。私も資本主義の中で生きていますから。

今、これと同じことが東北の被災地で起こっています。釜石は巨大イオンを誘致しました。津波で真っ平になってしまった所です。巨大イオンであり、一時的に雇用は増えますから、仕方がないのです。でも、採用はほとんど非正規です。そして、皆さんお分かりになると思いますが、郊外型のショッピングセンターの紳士服店や眼鏡店はどれもプレハブのような建物でしょう。要するに、その土地で50年、100年商売を続けようと思ったら、あんな建物を建てるはずがないのです。

神戸の真ん中にある老舗の建物は、どれも石造りの立派な建物だったではないですか。でも、10年、20年で撤退するから、非正規雇用であり、プレハブのような建物なのです。結局、地元には何も残りません。それでも被災地を責めることはできないですよね。当面の雇用は欲しいから誘致してしまいます。これが、東北の被災地で今起っている現象です。

先ほどの本屋の話に戻ると、皆さんも経験しているのです。郊外型のショッピングセンターに行

くと、本の並びから全国統一なのです。POSシステムというコンピューターシステムでつながっていますから、売れる本からレジの近くに置いています。私たちは市場原理によって思想統制され、読む本まで決められているのです。かつては、神戸や姫路ぐらいの規模の都市であれば、ちょっと変わった本屋や雰囲気のある古本屋が必ずありました。そういう本屋の店主は、全共闘崩れとか、東京でアングラ演劇を5年やっていたような人が戻ってきて、親の代を継いでいるわけです。商店街は基本的にポテンシャルのある場所です。要するに、家賃を払わなくていい商売ですから、日銭が稼げれば食っていけます。

私は商店街の子どもなのでよく分かるのですが、昔の本屋は雑誌だけ売ってれば、あとは好きな本を売っていられたのです。楽しい商売だったのです。でも、今はコンビニで雑誌を買うでしょう。若い人はもう雑誌を買いません。若い人が買わないから、週刊誌はどれも「70歳からのセックス」みたいな特集ばかりですよ。要するに、あの年齢層しか買わないのです。本はAmazonで手に入ります。だから、本屋は巨大な背景人口がある場所しか成立しなくなりました。

要するに、地方ほど無駄が許容できなくなっているのです。かつては地方に、無駄で豊かなものがあったのですが、今は逆転してしまったのです。地方ほど無駄が許容できなくなると、売れるもの、合理的なものしか、地方では置かれなくなりました。この認識から出発しないと現状の分析を誤ってしまうと思います。

では、地方都市にはそういう本屋はなくていいかということ、僕はそういう本屋が文学少年や文学青年を育ててきたと思うのです。立ち読みしていると、普段無口な店主が寄ってきて、「おまえもそろそろいい年なんだからツルゲーネフでも読めよ」とか、「そろそろドストエフスキーだろう。もう仕入れておいたから」というふうに、街にはお節介なおやじがたくさんいたのです。それは本屋だけではなくて、画廊や写真館、ジャズ喫茶、映画館などにもいて、そういうところで地域の文化は支えられ、そこからたくさんの人材が生まれてきたはずなのです。それが、今、根絶やしになっています。

ちなみに、フランス政府は3年前、通称Amazon禁止法を通しました。ネットで購入した書籍を無料で郵送してはいけないという法律です。この法

律一つでAmazonのビジネスモデルは壊れるのです。フランス政府ははっきりと、フランス国内にある4000の地方書店を守る法律だと言っています。地方都市の書店は、ただ単に本を買う場所ではなくて、地域の文化拠点なので、これを法律で守るのだということです。これは今の日本の規制緩和と真逆になっていることは分かりますよね。

日本政府は数年前、薬をインターネットで買えるようにしました。それは便利になって、良いことです。でも、これが進むと地方の薬屋は全部つぶれます。そして、皆さんご承知のように、地方の薬局は、ただ薬を買う場所ではないですよ。週に1回、おじいちゃん、おばあちゃんが薬を買いに来て、対面で話をしながら顔色を見て、「おばあちゃん、ちょっと顔色が悪いんじゃないの」「足の具合はどう?」「お孫さん元気?」と聞いてあげたり、来なくなったら心配して電話をかけてあげたりする、地域医療の拠点なのです。

それを単純に無くしていいのか。もちろん合理性は必要です。だから、もしなくすのであれば、それに代わるものを用意しないと、単なる規制緩和だけなら、完全な地方切り捨てになってしまいます。では、それに代わるものは何なのかを、私たちは考えていかなければならないのです。

7. 無意識のセーフティネットがなくなると

無意識のセーフティネットの話に戻ります。20年ほど前、ある週刊誌が、なぜ地方都市で青少年の凶悪犯罪が増えているのかという特集を組みました。ちなみに、青少年の凶悪犯罪自体は日本全体で増えていません。減っているほどです。まだまだ日本は安全な国なのですが、問題は地方都市に急に起こるといことです。思ってもみなかったような事件、かつては東京や大阪のような大都会でしか起こらなかったような事件が急に起こります。だから、地方の人たちのショックも大きいのです。

記事には幾つか理由が書かれていました。一つは、若者の居場所が固定化、閉塞化している。例えば高校を中退したり、ドロップアウトした子たちの居場所が、ゲームセンターやカラオケボックスやネットカフェぐらいしかありません。カラオケボックスはすごく象徴的です。防音がしっかりしていて、外から全く見えません。しかも、かつての銭湯のような学年を超えた交流もありません。そういう所がいじめや青少年犯罪の温床になって

いると考えられています。

それから、成功の筋道が一つしかなく、そこから外れてしまうとなかなか戻れない。これも東京、大阪あるいは神戸ぐらいの都市ではフリースクールなども完備して、今は不登校になっても、親が覚悟を決めればそれほど問題になりません。引きこもりと不登校は違います。今、不登校の子どもの大学の進学率はものすごく伸びています。要するに、日本はもはや高校に行かなくても大丈夫な社会システムになっているのですが、地方都市はまだ土着性が強いので、「あそこのお子さんは高校に行っていないらしいわよ」と言われて逆に引きこもってしまいます。恐らく不登校の発生率はどの地域も同じなのです。今は地方でも不登校の問題はあります。ただ、復帰する割合が、人口20万～50万人ぐらいの都市が最も低いのではないかと推測されています。要するに、中途半端に世間の目が厳しいのです。

8. 大学入試改革

この問題は、不登校などの問題だけではなくて、いろいろなところで現れています。一番分かりやすい例が、大学入試改革です。皆さんも関心があるところだと思うので、話はそれますが教育の話に入ります。2020年に今のセンター試験が廃止されて、非常に基本的な学力を問う一次試験になります。文部科学省は私たち大学側に、「二次試験は大学に入ってから学びの伸びしろを問うような試験をしろ」と言います。これを潜在的学習能力というのですが、無茶振りですよ。それが分かるなら、高校でやっておいてくれという話です。しかし、文科省は教育機関に無茶振りすることで自分の権威を高める本能があるので、こういうことを言ってきます。そこでどんな能力が要求されるのか。思考力、判断力、表現力は昔から言われていたのですが、最近急に言われ始めたのが主体性、多様性、協働性を問うような試験をしろということです。主体性と協働性は時に相反しますから、こんなものを一つの試験で見られるのかと思います。

私は、香川県善通寺市という人口5万人ぐらいの所にある四国学院大学という全学1300人の小さな大学の学長特別補佐をしています。地方の1000人クラスの私立大学は、放っておけば人口減少で確実につぶれます。安倍さんの友達でもない限り確実につぶれます。四国学院大学は生き残りを懸

けて2年前から、新制度入試の前倒し実施をしています。どんな試験問題を出すのかということも発表しています。例えば、レゴで巨大な艦船を作るという問題は、数年前にオックスフォード大学で実際に出た問題です。8人1組で、レゴで巨大な戦車を作るという問題で、設計図を書いて、役割分担して、作業手順を決めて、地道な手作業もいとわないなどのいろいろな能力を見る試験です。どんな能力を見るのかということも発表しています。自分の主張を論理的、具体的に説明できたかという主体性も大事ですが、タイムキープを意識して議論をまとめることに貢献したか、地道な作業をいとわずにチーム全体に対して献身的な役割が果たせたかといった協働性も見ると試験です。

一つだけ問題をご紹介します。「以下の題材でディスカッションドラマを作りなさい。2030年に日本が財政破綻、債務不履行になって、国際通貨基金（IMF）の管理下に置かれました。IMFからは、本四架橋は3本も要らないので、2本廃止なさいと命令が来ました。どの2本を廃止しますか。兵庫県、岡山県、広島県、徳島県、香川県、愛媛県の各県代表と司会1名の7人1組でディスカッションドラマを作りなさい」という問題です。これは実際に出た問題です。四国学院大学は、ほぼ全入で偏差値が付かないぐらいのレベルの大学です。でも、実際にこの問題を出しました。その日に初めて会った7人が別室に連れていかれると、コンピューターが2台置いてあります。検索可能なので、このレベルの問題でも大丈夫なのです。分からない単語があれば調べればいいのです。当然、IMFを知らない子もいますが、検索すればいいのです。

今時、鎌倉幕府が何年に開かれたかを覚えておく必要はないでしょう。僕は全国の中学生が試験中に内心突っ込みを入れていると思うのです。「これは覚えておく必要があるのかな。検索すればいいじゃん」。ご存じの方も多いと思いますが、お茶の水女子大学は今年度のAO入試を図書館で行うことになりました。調べる力を見る試験をするためです。理系のAO入試は実験室で行うことにしました。私の母校である国際基督教大学（ICU）は数年前から、大学の授業を受けて、ノートにまとめて、その後に設問が出ます。要するに、聞いて自分でまとめる力を問います。小規模の大学ほど、前倒しでこういう入試が現実には始まっているのです。これは夢物語を言っているのではなく、実際にこ

ういう入試が始まっているのです。

話を戻すと、この試験は7人1組なのですが、コンピューターは2台しか置いてありません。だから、その場で初めて会った人の中で、誰が検索するか、いつ検索するか、得た情報をどう使うかが問われるのです。しかも、採点官側の基準では、検索のうまい子が評価されるわけではありません。一番評価されるのは、「検索うまいね。じゃあ俺はメモ取るわ」というふうに、自分の役割を担った子です。そういう入試をずっと作ってきました。

そもそもなぜ私がこういう仕事をしているかというと、大阪大学大学院の奨学金選抜で研究費もたくさん頂いたので、日本一ではなく世界最先端の入試を作る取り組みを7~8年ずっとやっていたのです。40人を最終的に20人に絞る試験だったのですが、ある年は40人をホテルに2泊3日缶詰めにして演劇を作る試験をしました。ある年は映画を作る試験、ある年はノーベル賞学者の朝永振一郎先生が60年前に書いた「光子の裁判」という光の性質を表すための戯曲を読ませ、スーパーサイエンスハイスクールの1年生を想定して、高校生に光の性質を説明する紙芝居を作りなさいという試験をしました。そういう試験をずっと作ってきたのです。

私は一応リーダーだったので、阪大の教員20人ぐらいでチームをつくって、最初の会議のときに、『『宇宙兄弟』という漫画を全巻買って読んでください』とお願いしました。『宇宙兄弟』をご存じの方は多いと思いますが、JAXAの宇宙飛行士選抜試験を描いた作品です。今までの日本の学力試験は、その時点での生徒・学生の知識や情報の量を問うて、上から20番なら合格、21番以下なら不合格としてきました。でもJAXAやNASAの試験は違うのです。命のやりとりができるクルー（仲間）を集める試験だから、いろいろな能力を見なければなりません。共同体がピンチのときにジョークを言って雰囲気や和ませられたり、斬新な意見でピンチを切り抜けられたり、一方でどんなに良い意見でも普段真面目に地道な作業に参加していなければ信用されないなど、いろいろな能力が求められます。共同体ですから、当然いろいろな人がいてくれないと困ります。今のジャイアンツのように、お金の力だけで4番バッターばかり集めても勝てません。バントのうまい選手や足の速い選手や守備のうまい選手がいろいろななければなりません。

恐らく日本の大学もこう変わっていくだろうと考えられます。なぜならハーバード大学やマサチューセッツ工科大学 (MIT)、日本の京都大学などは、授業内容をどんどんインターネットで公開しています。変な話ですよ。試験で受かって高い授業料を払っているのに、その授業がインターネットで見られるのです。でも、世界の趨勢は、情報はもはや囲い込むものではないと考えています。囲い込んでお金をもうけることは、ネット社会では不可能なのです。

例えば、地方の進学校の生徒たちの受験勉強は様変わりしています。塾などないのです。全員がインターネットで予備校の授業を見ているのです。これは当然課金されて、予備校に料金を払って、パスワードを入れて受信するのですが、囲い込むことは無理ですよ。友達が隣にいて、「おまえの家は貧乏だから、一緒に見ようぜ」と言ったらそれで終わりです。インターネットは情報を囲い込んでお金をもうけていません。GoogleもFacebookも全て広告収入でもうけています。

かつては京都まで出ていかなければ得られない知識、東京まで出ていかなければ得られない知識、ニューヨークやパリまで行かなければ得られない知識があったのです。しかし、ネット社会ではそんなものはありません。情報や知識は世界共有です。それを前提にして、ハーバードで共に学ぶことが大事なのです。MITで共に議論することが大事なのです。それが世界のトップエリート校の基本的な考え方です。だから、何を学ぶかよりも、誰と学ぶかの方が大事になります。

だとすると、いろいろな人がいてくれないと困るのです。偏差値で輪切りにしてしまったら、特に日本の場合、同じような経済力の家庭、同じような生活背景の子しか来なくなってしまいます。今は東京大学でも、特に東京工業大学などはそうなのですが、関東出身者ばかりになってしまっています。そうすると、大学自体の活力がなくなります。だから、いろいろな人を採らなければなりません。そういうふうに、学ぶ仲間を集めるための大学入試にこれから変わっていくだろうと考えられています。

9. 身体的文化資本

世界中の入試を調べると、出題者は「受験準備のできない問題を毎年考えるのは難しい」と言います。つまり、高校側からすると受験指導、進路

指導ができなくなるわけです。進学校では、進路指導のうまい先生がいて、「神戸大に入るなら英単語4000語覚えておけよ。阪大なら5000語、京大なら6000語だぞ」と言われて、真面目に信じて勉強して、模擬試験を受けてA判定、B判定が出るというふうに、指導されてきたわけです。でも、レゴで巨大な戦車を作るのにA判定もB判定もないでしょう。要するに、1～2年の受験準備では太刀打ちできないような試験になっていくのです。こういうものを社会学の世界で、身体的文化資本といいます。

身体的文化資本とはピエール・ブルデューというフランス人が提唱した概念なのですが、センスやマナーといったものです。例えば、人種偏見やジェンダーに対する偏見がないことです。分かりやすい例では、男尊女卑の家庭で育って、男子校に通っていた子が先ほどのような試験を受けたときに、大抵は女子の方が弁が立ちますから、わーっと言われたときに「女は黙ってろ」と一言言えば、その子は不合格です。今までの神戸大や阪大の試験には、ジェンダーなどという項目はなかったでしょう。でも、文科省は私たち大学側に、大学に入ってから学びの伸びしろを見なさいと言っています。大学は、アクティブ・ラーニング化といって、先ほど言ったように知識や情報を授ける授業ではなく、ディスカッションする授業をどんどん増やしています。そのときに、女の子と議論できないのであれば、その子にはその能力がないということなので当然不合格です。そういう能力を見られるようになれということです。

身体的文化資本は大体20歳までに形成されるといわれています。分かりやすい例は味覚です。味覚は12歳ぐらいまでに形成されるといわれています。ファストフードばかり食べていると、舌先の味蕾がつぶれて微妙な味の見分けができなくなります。身体的文化資本を蓄積するためには、本物、良い物に触れさせるしかないといわれています。味覚を身に付けるためには、おいしいものとまずいもの、安全なもの、危険なものを両方食べさせて、「こちらがおいしいでしょう」と言う親はいません。おいしいもの、安全なものを食べさせ続けることによって、まずいもの、危険なものを吐き出す能力が培われます。あるいは、骨董品の目利きを育てるにも、本物、良い物だけを見せ続けるそうです。そうすると、偽物を見抜く力が身に付きます。要するに、身体的文化資本は理屈

ではないので、できるだけ若いうちから良い物に触れさせれば偽物を見抜く力が身に付きます。だとしたら、私がやっている演劇やダンス、オペラ、ミュージカルなどのパフォーミングアーツは、東京の子が圧倒的に有利ではないですか。神戸や西宮、大阪はまだいいですが、それよりも地方と東京とでは100倍ぐらいの格差があります。

例えば六本木や赤坂がある港区は、サントリーホールに小学校6年生全員を招待しています。港区は親の3分の1が社長だそうですから、港区の子どもにそんなことをする必要はないだろうと思いますが、港区に悪気はないのです。港区にサントリーホールがあって、サントリーホールは地域還元事業という立派な事業です。世田谷区は日本語特区ですから、1週間に1回、国語以外の言語活動があります。豊かな区なので、自前で音声言語中心の日本語の教科書も作っています。そして、世田谷区には野村萬斎さんが芸術監督を務めている世田谷パブリックシアターという日本で一番強い公共ホールがあるので、そこに依頼するとアーティストが無償で派遣されます。世田谷区内の3分の1の小中学校がプロの狂言師や俳優から授業を受けています。

ちなみに、兵庫県内では伊丹市がこれと同じことをしています。多分、財政が豊かだからできるのだと思うのですが、私もお手伝いしています。もっと分かりやすい例では、4～5年前の数字で演劇やダンスを本格的に習える高校が全国に50校あるのですが、このうち8割が東京、神奈川、大阪、兵庫に集中しています。兵庫県にも宝塚北高校があります。他の地域には教える人がいないので、コースさえ開設できません。このぐらい文化格差が広がってしまっているのです。

もう一つは、経済の問題です。経済格差が教育の格差に直結していることは最近よく報道されていますが、文化格差はもっと深刻です。教育の格差は、まだ発見されるのです。学校に来てさえくれれば、「この子は勉強ができるのに、家が貧乏で大学に行けなくてかわいそうだな」とみんな思うし、本当に優秀なら奨学金などで助けてあげられます。でも、文化格差は発見すらされないのです。親が美術館やコンサートに行く習慣がなければ、子どもだけで行くことは起きないので、行く家庭と行かない家庭でスパイラル状に差が開いてしまいます。

日本は明治以降150年をかけて、教育の地域間格

差がない素晴らしい国をつくってきました。しかし、文化の地域間格差と経済格差の両方向に引張られて、子ども一人一人の身体的文化資本の格差がものすごく広がっています。しかも、大学進学や就職に直結する時代になってきています。これを解決しない限り、東京一極集中は解決しません。実は、これは経済の問題ではないのです。東京が文化を握っているから、そこに人が吸い上げられているのです。ここを変えなければなりません。

気づき始めた自治体もあります。例えば岡山県奈義町です。鳥取県境にある人口6000人の小さな町です。昨年から公務員試験を演劇にしました。実は豊岡市も今年度から、公務員試験に演劇を導入しました。演劇ができないと公務員になれないというすごい時代です。

豊岡市では今年どんな問題を出したかというところ、「2030年に旧城崎町が住民投票で再独立を可決してしまいました。法的拘束力はないのですが、対応せざるを得ません。そこで、市の中に諮問委員会をつくります。ステークホルダーを洗い出してディスカッションドラマを作りなさい」という問題です。もう一つの問題は「2040年にコウノトリが増え過ぎて、隣の新温泉町でコウノトリが通学途中の子どもを襲う事件が起きてしまいました。対策委員会をつくるので、ステークホルダーを洗い出して対策委員会をつくりなさい」という問題です。市長以下、非常に好評でした。

奈義町の試験は、試験問題を変えただけではないのです。試験官に必ず若い女性職員を入れてもらうことにしました。それで、半日一緒にグループワークを見続けるのです。そして、能力を見る試験から、働く仲間を選ぶ試験に変えていきました。奈義町は職員80人の町役場です。80人の町役場ならば、どんなに優秀でも雪が降ったら雪かきをしてもらわなければならないし、認知症のおばあちゃんを担いで病院まで運んでもらわなければならない。いろいろな能力を持っていない限りなりません。そして、その瞬間から6000分の1の町民になってもらわなければならない。良き公務員である前に、良き町民として振る舞えなければ、共同体の一員にはなれないわけです。そういう働く仲間を選ぶ試験に変えていくことが、この試験の眼目です。

奈義町はそれだけではありません。きめ細かい子育て支援と教育改革をずっと行ってきて、2年

前に特殊出生率2.81という日本一の町になりました。2.81は驚異的な数字です。2点台後半は沖縄の離島ぐらいしかないので、からくりは簡単です。隣は人口10万人の津山市なのですが、津山で働く若い夫婦が結婚や出産や家を立てるときにみんな、教育政策と子育て支援がしっかりした奈義町に移り住むのです。それで、どんどん子どもを生みます。

神戸辺りでは当然、職場の沿線に住みますが、兵庫県北や岡山県北は車社会ですから、津山で働いていても、車で30分圏内ならどこに住んでも同じです。当然、子育てや教育の環境が良い所を選びます。恐らく夫婦であれば8割方は奥さんの意見で決まるのではないかと思います。男は働いているだけです。それがいいとは言いませんが、日本の現状はそうです。奥さんが子育てと教育を担うので、女性に好かれる町でなければ駄目なのです。

要するに人口減少対策は簡単です。25～35歳の女性に好かれる町をつくらなければならない。大体成功している町は、おしゃれなカフェやイタリアンの店が必ずあります。でも、奈義町はそれだけではないのです。子ども歌舞伎をずっと守ってきて、小学校3年生は学校で歌舞伎を習います。奈義町の子たちは面白くて、例えばスポーツ少年団などで遠征に行ったときに、車内で飽きてくると普通はしりとりなどをしますが、奈義の子たちは一人が歌舞伎のせりふを言うと、みんなで唱和するのです。「白浪五人男」などもみんな言えるのです。文化資本がどれだけ蓄積されているかということです。

それから、6000人の町ですが、磯崎新建築の現代美術館と図書館を持っています。荒川修作さんの作品も常設されています。図書館は素晴らしい眺めで、小窓から奈義の象徴である奈義山が見えます。周りを保育園児たちが走り回っています。隣にもう一つ建物があって、奈義町はここに今年、窯焼きピザを提供するイタリアンを誘致しました。オープン以来、行列が絶えません。津山から平日の昼間でも皆さん食べに来ます。美術館があって、自然があって、おいしいイタリアンがあります。ますます奈義のイメージは良くなっているわけです。

要するに、教育だけでは駄目なのです。教育と文化をセットでまちづくりをしていかないと、若い女性は引きつけられません。文化というの

は、ただ単にアート・芸術だけではなく、生活文化、食、環境といったものも含めた暮らしやすさ、センスのようなものがこれから重要になります。ターゲットは25～35歳、広く見積もって20～40歳の女性に好かれる町をつくっていかねばなりません。だから、壇蜜さんをイメージビデオに使っていたら駄目なのです。あれで話題になったからいいと県知事は言いましたが、何を失ったか全く気が付いていないのです。ああいうことをしては駄目です。男性目線で町をつくっていたら、その町は滅びます。

10. 一体型からネットワーク型に

無意識なセーフティネットの話に戻したいと思うのですが、もちろん青少年犯罪は地方だけの問題ではありません。私は、駒場という街に生まれ育ちました。駒場は渋谷の近くにあるのですが、私は子どものときから渋谷が遊び場でした。渋谷は今でこそ修学旅行生がみんな行くような若者のメッカといわれていますが、私が小学生の頃までは汚くて小さな街でした。「渋い谷」と書くぐらいですから、谷底の小さな街だったのです。戦前は世田谷の陸軍の兵士が週末に遊ぶためにつくられた街でした。それが西武と東急という2大資本の力で無理やり広げられたのが今の渋谷です。

にぎわって経済的にも発展しましたが、その結果どうなったかという、谷底のセンター街と呼ばれるところで、今はもういないのですが、チーマーと呼ばれる不良少年たちが地べたに座って、ものすごく危険な街になってしまったのです。一説によると、新宿の歌舞伎町より危険だといわれています。帰り道なのでそこをよく通るのですが、地べたに座っている子たちを見ると、この子たちの責任ではないだろうといつも思うのです。渋谷という街は、資本の論理だけで広げてしまったために、ヨーロッパの街なら必ずあるような噴水のある広場や公園が一つもないのです。一つだけ宮下公園という公園があるのですが、この十数年、ホームレスのたまり場になっていて、若者たちは寄り付けられない状態になっていました。

要するに、社会的弱者の居場所のない街になってしまったのです。しかし、社会的弱者は富に吸い寄せられるように集まってきます。そして、居場所のない社会的弱者が右往左往することによって、渋谷はどんどん危険度を高めていきました。その結末を、皆さんはワイドショーを通じて見て

います。一つは、あまりご記憶ないかもしれませんが、渋谷区は宮下公園のネーミングライツをNIKEに売ってスポーツ公園化し、一部有料化しました。社会的弱者の居場所がない街なのに、公園を一部有料化してしまったのです。しかも、そこにいたホームレスたちは、支援団体に左翼勢力が入っていたので、折り合いが付かなくなってしまい、結局は行政代執行で警察権力を導入してホームレスを排除しました。

でも、排除の論理からは何も解決しません。結局、そこにいたホームレスたちが渋谷中に拡散し、渋谷はものすごく汚い街になりました。半蔵門線という地下鉄があるのですが、コンコースが2層構造になっています。それをぜひ夜の8時ごろ、地下2階に行ってみてください。ホームレスがたくさんいます。地下1階にはいないのです。多分、警察と協定しているのです。その向こう側にファッションビル109があります。その地上がワールドカップやハロウィーンでばか騒ぎするスクランブル交差点です。これは日本の象徴です。皆さん知らないと思いますが、あの2層下にホームレスが普段たくさんいるのです。それが渋谷です。表面上はものすごく華やかですが、排除の論理でどんどん街が危険になっています。

もう一つの結末は、海老蔵事件です。チーマーの子たちが成人して六本木に流れて、元暴走族とつるんで「半グレ」と呼ばれるやくざより恐いとされる反社会的集団をつくり、海老蔵事件を起こし、クラブで人違いによる殺人事件まで起こしてしまいました。こうなると、「繁栄したのだから、そういうやつらがいてもしょうがないだろう」というレベルではないわけです。まちづくりの失敗がそういう反社会的集団まで生み出してしまったのです。

この問題はさすがに極端な事例なのですが、こういう事例もあります。20年ほど前ですが、東村山という東京の近郊の街で、中学生がホームレスを撲殺する事件が起きました。これは2月の寒い時期だったと思います。やはり居場所がなかったのだと思います。ホームレスも中学生も図書館に行くのですが、日本の図書館は残念ながらコミュニティスペースではありません。コミュニティスペースに作り変えている図書館も結構ありますが、基本的にはまだ学びの場です。静かにしなければなりません。そこで中学生が騒いで、ホームレスがたしなめて、中学生がそれを逆恨みして、塾の

帰りにバットでホームレスを撲殺したのです。これは明らかに中学生が悪いです。でも、その背後には社会的弱者の居場所をつくってこなかった日本の都市政策の無策があるのです。

あるいは、あまり短絡的に考えるのはよくないのですが、昔もいじめは学校でありました。しかし、昔は子どもたちの居場所が学校だけではなく、「ドラえもん」に出てくるような原っぱみたいな世界がありました。でも、原っぱでもいじめはあるのです。ジャイアンみたいなのがいじめているのですが、昔は学年を超えた交流なので、ガキ大将は自分の子分がいじめられていると仕返しに行ったわけです。でも、今の子どもたちの世界には、ガキ大将という言葉も仕返しという言葉もありません。学校しか生きる場所がないから、ここでいじめられてしまうと、あっけないほどに不登校になったり引きこもったり、極端な場合は自殺に走ってしまったりします。要するに、子どもにとっても、大人にとっても、重層性のない社会は生き苦しいのではないかと思います。この重層性は、経済原理や市場原理だけではどんどん失われていってしまいます。合理性だけで街をつくっていくと、どんどん重層性のない社会になってしまいます。

では、昔に戻ればいいのかというと、そうではありません。原っぱを作れば子どもは戻ってくるかというと、日本の子どもは、塾だの、家庭教師だの、習い事だのと世界で一番忙しいですから戻ってきません。だから、私たちが考えなければならぬのは、現代社会に合った、市場原理とも折り合いのつく新しい広場をつくることではないかと思います。その一つが、私が仕事をしているような劇場や音楽堂、美術館、あるいはフットサルのコートかもしれないし、ミニバスケットのコートかもしれないし、図書館かもしれません。

例えば図書館は、これから非常に重要な役割を果たします。引きこもりの方の中で一定数、図書館とコンビニなら行けるとい層がいます。その方たちに、とにかく図書館まで来てもらって、今までと違って談話室のような防音した空間を作って、ここではしゃべってもいいという地帯を作れば、先ほどの中学生もホームレスとぶつからなかったでしょう。そこに、できればボランティアやカウンセラーを配置して話せるようになれば、今度は絵本などを持ってきて、「ちょっと読み聞かせでもやってみない？」というふうに誘う。これ

が居場所と出番という考え方です。若者たちの居場所をつくり、さらに社会との接点をつくっていくのです。

今までの日本の政策は、居場所づくりと出番づくりを別々の部署でやっていました。これをつなげていかなければなりません。つなげるのだとしたら、劇場や音楽ホール、美術館、図書館といった公共文化施設の役割は非常に大きいです。とにかく若者たちにそこに出てきてもらって、そこから社会とつなげていく役割がこれからの公共文化施設や文化政策に求められます。そのとき大事なのは、たくさんのメニューを用意することです。子どもたちが何に引っかけってくるのかは分かりません。ヒップホップに興味のある子もいれば、絵に興味のある子もいれば、音楽に興味のある子もいます。これらを全て用意するのは無理なので、NPOの方々にやってもらって行政が支援するシステムを早くつくらなければなりません。

今までの日本社会は、稲作文化の仕方がないところで、みんなで田植えをして、みんなで草刈りをして、みんなで稲刈りをしないと、米の収量が上がりません。麦は家族経営でできますが、米は集落で頑張らなければなりません。だから、みんなでお祭りして、みんなで休んで、みんなライフスタイルは一緒だったわけです。しかし、どんな地方の若者たちも、夏は盆踊り、秋は祭り、冬は餅つき、春は福引きというふうに全部の行事に参加させられるような強固な共同体はうんざりです。だから、みんな都会の無名性に憧れて、外に出ていってしまいます。

ただ、最近はどうなアンケートを見ても、高度な芸術文化活動、スポーツ、環境保護運動、ボランティア活動など、自分が積極的に参加したいアクティビティに関しては、車で30分圏内ならば、人々はストレスなく移動するといわれています。だから、今までのように強い共同体をつくるのではなく、少し緩めて、自治体でいえばやや広域にする代わりに、いろいろなアクティビティを細かく用意していく必要があると思います。誰もが誰かを知っている強固な共同体から、誰かが誰かを知っている緩やかなネットワーク社会に編み変えていく必要があると思います。その接点に、音楽があったり、演劇があったり、美術があったり、フットサルがあったり、ミニバスケットがあったり、農作業体験があったりするのではないのでしょうか。つまり、何かでつながっているということ

です。今までの一体型の政策からネットワーク型の政策に、私たちは切り替えていく必要があります。

11. 文化による社会包摂

こういうことは、ヨーロッパの文化政策では普通に行われています。一番象徴的なのは、ホームレスプロジェクトです。ホームレスの方たちに1カ月に1回ぐらいシャワーを浴びてもらったり、バザーで集めた服に着替えてもらったり、美術展やコンサートに招待したりします。先進国のホームレスは生まれながらホームレスではないので、芸術的な体験やスポーツをしてもらうことで、生きる気力を取り戻してもらい、社会復帰してもらうのです。皆さんからするとホームレスプロジェクトは遠いイメージかもしれませんが、ヨーロッパでは普通に政策として行われています。

私は東京の駒場で、民間の劇場を経営しているのですが、7～8年前から雇用保険受給者に対する大幅な割引を設定しています。これはヨーロッパの美術館や劇場では普通に行われています。海外に行く機会があったらぜひ見てください。学割や高齢者割引や障害者割引は兵庫県内のどの施設にもありますが、ヨーロッパではその他に失業者割引というものが必ずあるのです。

日本は逆の施策を行ってきました。雇用保険受給者が平日の昼間に劇場や映画館に来たら、求職活動を怠っているとして雇用保険を切ってしまう。もっと厳しい場合は生活保護さえ切ってしまうような政策をとってきたわけです。これにも理由がありました。高度経済成長の時代であれば、半年も頑張ればもう一度職に就けました。そういう時代の政策のままなのです。今はもう人手不足は解消したので、問題は自分に合った職がないことです。日本人は真面目だから、失職するとまだまだハローワークに行き、一生懸命職を探します。ただ、製造業で真面目に働いてきた方たちにとっては、製造業の現場はもうないので、自分に合った職がなかなかありません。そうすると、中高年の男性が「自分は社会に必要とされていないのではないか」と思うようになってしまいます。要するに、非常に強い疎外感を感じてしまうのです。世間の目も厳しく、「あそこのおじさんは会社に行っていないらしいよ」などと言われて、どんどん引きこもってしまうところが、一番の問題です。つまり、精神的なマッチングができていないということなのです。

デンマークやスウェーデンでは、雇用保険の受給期間が大体2～3年あって、最初は演劇やダンスのワークショップや農作業体験などをさせさせるのです。通常、製造業が厳しいのであれば、介護の人手が足りないのだから介護に回ればいいのではないかと統計学者は考えるでしょう。でも、人間は統計どおりには動きません。真面目にねじを30年回して日本の産業を支えてきたという誇りを持っている方が、失職したからといって翌日から高齢者のお尻を拭く仕事をするのは無理なのです。それはプライドが許しません。だから、北欧の雇用政策では、最初の職業訓練の段階で演劇やダンスのワークショップをして、人を喜ばせる喜びを感じさせ、マインドを変えてから技術を教えるのです。今の職業訓練は、刑務所の受刑者に「これをやれば食っていけるぞ」と彫刻を教えるような感じですよ。でも、人間はそうはいかないではないですか。

日本の社会が抱える大きな問題の一つが、中高年の男性の引きこもり、そして孤独死・孤立死です。孤独死・孤立死は、社会にとって大きなリスクとコストになります。その部屋は誰も住まなくなるし、周りの人のショックも大きく、近所の人さえ引っ越してしまいます。それは、勝ち組であるはずの不動産所有者にとっても、個人では負い切れないほどのリスクとコストになるわけです。

だから、私たちは考え方を変えていかなければならないと思います。失業中の人が平日の昼間に映画館や劇場に来てくれた方が、最終的に行政や社会のコストもリスクも軽減されるので、「失業しているのに劇場に来てくれてありがとう」「社会とつながってくれてありがとう」「生活保護を受けていて大変なのに音楽を聴きに来てくれてありがとう」「犯罪に走らなくてありがとう」と考えた方がいいと思います。こういう考え方を「文化による社会包摂」といいます。いわゆるソーシャルインクルージョンです。

日本は古くから地縁血縁型の社会でした。しかし、戦後に崩れたわけです。それに取って代わったのが企業社会でした。社宅に住み、社員運動会に参加し、社員旅行を楽しみ、企業年金に守られました。しかしそれが1990年代以降、企業がグローバル化する中で労働者を守る必要が全くなくなってしまい、企業社会が崩壊しました。ふと振り向くと地縁血縁社会もありません。これが一時流行語になった「無縁社会」の正体です。

しかも日本には、最後のセーフティネットである宗教がありません。ヨーロッパのホームレスは教会に駆け込めますが、日本にはそれがないので、先進国の中で最も人間が孤立しやすい社会になっています。そして、いったん孤立してしまうと、行政は手が付けられません。何の接点もなくなってしまうからです。それがあるとき、犯罪を起したり、反社会的な行動を起したりします。だから、社会とつながってもらい、セーフティネットをつくっていくことは、最終的に行政のリスクやコストを軽減させるというのが社会包摂の考え方です。であるならば、広い意味での文化活動の役割は、今までのような情操教育や生涯教育という視点ではなく、社会政策の一環として捉えられる時代になるのではないかと思います。ただ、社会包摂はどちらかというと受け身の政策なので、これだけでは駄目です。

12. 観光について

そこで、少しポジティブな観光の話をしてします。金沢21世紀美術館をご存じの方も多いと思います。今、兼六園に行く10人に9人は金沢21世紀美術館にも行きます。金沢の宿泊者数は2002年だけ一度上がって、また下がっています。2002年に何があったかという、「利家とまつ」が放送された年です。大河ドラマ効果の1年なのです。「軍師官兵衛」もそうだったと思います。金沢というのは兼六園一つに頼っていた典型的な日本の観光都市で、1980年代以降、団体客の減少と海外旅行の増加によって長期低落傾向にあったのですが、2004年以降にV字回復します。これは21世紀美術館効果だろうといわれています。

兼六園の開園時間は5時までなのです。寒い地域なので、2～3時で観光を終えて、和倉温泉や加賀温泉に行ってしまう。ところが、21世紀美術館は6時までで、周辺のカフェは8時まで、交流ゾーンは10時まで開いています。そうすると、一定数の人が金沢に残るわけです。今、ヨーロッパは完全なローコストキャリア(LCC)の時代です。ヨーロッパ中どこに行くにも100ユーロ、1万円以内で移動できます。時間は1時間半以内です。だから、昼間にエッフェル塔に登って、夜はウィーンでオペラを見るということが普通にできます。

そこで、ヨーロッパの各都市は、どうすれば滞在客が増えるかを競っています。泊まってもらわなければお金は落ちないので、昼の観光で落ちる

お金は限られています。例えば、ウィーンのオペラ座は毎日違う演目です。毎日違う演目を上演すれば、オペラ好きはずっと残ってくれて、昼間はザルツブルグに行ってモーツァルト・ハウスを見たり、チロルの森に行って「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台を見たり、ミュンヘンまで足を運んで美術館に行ったりします。でも、帰ってくると、泊まって食事をしてオペラを見て、最低でも5万円ぐらい落とします。ウィーンのオペラ座は収容人員が2000人ですから、1回で1億円、年間250ステージで250億円、そこにホテルやレストランの従業員の雇用が生まれ、消費が生まれます。経済波及効果は数千億円といわれています。だから、法律で毎日違うオペラを上演すると定めても、ウィーン市あるいはオーストリア政府としてはペイするのです。これをナイトカルチャー、ナイトアミューズメントと呼びます。ヨーロッパの各都市は、今これを競っています。

観光業界でも、神戸は注目されています。ちょっと口の悪い人たちが「異人館にインバウンドは来ないしなあ」「中国人は中華街に行かないしなあ」と言います。神戸はイメージが良かったので、改革が遅れたのです。でも、神戸にはすごく強みがあるのです。なぜなら、これほどの世界遺産に囲まれている大都市はそれほどありません。京都、奈良、高野山、仁徳天皇陵、姫路城、足を伸ばせば広島もあります。だから、神戸は今までと違って昼の観光ではなく、夜泊まってお金を落としてもらうようにすればいいのです。夜景もきれいだし、食は世界に冠たる神戸ビーフを持っています。富裕層に神戸で長期滞在してもらい、いろいろな所に行ってもらうのです。でも、そのためには文化政策をきちんとしないと、絶対にお客さんは来ません。

昔は、男しか旅行をしなかったのが、観光地の近くには歓楽街を作っておけばよかったのです。温泉街にはストリップ小屋を作っておけばよかったのです。でも今は、家族で旅行するでしょう。世界の富裕層はみんな家族で旅行します。だから、夜の時間帯に家族で楽しめるもの、子どもが安心して見られる質の高い芸術がないと、世界の観光都市にはなれません。それが世界標準です。神戸が世界標準の観光都市を目指すなら、それしか生き残る道はありません。

大阪が今せつかく間違った道を進もうとしているのですから、神戸はぜひ同じ道を進まないよう

にしてください。カジノだけで成功することはありません。ご存じのように、アメリカ中にカジノはあったのですが、ほとんどがゴースタウンになっています。なぜラスベガスだけ生き残ったかというと、ラスベガスはショービジネスやスポーツと合体させて、お父さんがカジノに行きやすい状態をつくっているからです。「おまえら、ちょっとミュージカルを見ておけ。俺はスロットマシンに行くから」というふうにできるから、ラスベガスだけが生き残ったのです。なので、文楽の助成金を廃止してカジノを誘致するのは政策矛盾です。世界標準からすると間違っています。文化がないところには、カジノさえ成立しません。

シンガポールは、カジノだけが成功したのではありません。カジノを始める前に、シンガポールオーケストラが成功しています。今や東南アジア一のオーケストラです。半分以上が白人で、お金の力でものすごい演奏者を連れてきています。周りの華僑の富裕層が、何度でもシンガポールに来ています。かつてシンガポールは買い物天国だったのですが、シンガポールドルが高くなって買物の魅力がなくなった段階で、シンガポール政府は観光政策を見事に転換して文化都市にしたのです。だから、シンガポールは成功したのです。

もう一つは、東北・八戸の「ポータルミュージアムはっち」です。八戸も中心市街地の通行量がどんどん減ったので、活性化の切り札として「はっち」を造りました。人口23万人の街ですが、「はっち広場」という大きな広場が一つあるだけで、あとは小さなスペースや子育て支援施設などの集合体なのです。この建物では年間400のワークショップを行っています。200が実施事業で、200はNPOの事業を支援しています。職員は大忙しで、10人ぐらいの職員で回しています。

しかし、それを行ったおかげで、1年目にちょうど88万8888人を動員したと本人たちは言っています。これは嘘の数字だと思っていて、八戸で「はっち」だからといって、こんな都合良いことになるわけがないと思うのですが、このぐらいの数字を出しています。表通りの通行量は倍増し、中心市街地全体でも1年で30%増えました。そして、驚くべきことに、1年で23、3年で50の空き店舗が埋まりました。これは最も成功した文化施設によるまちづくり、商店街活性化の事例として、注目を集めています。

仕組みは簡単です。私たちは商店街の再活性化

をするために、大規模資本と戦おうとして福引きや値引き競争などの経済原理で戦おうとしていました。でも、それでは勝てるわけがありません。商店街は元々、人が来る場所だったはずですが、だから、来る理由が一つあれば来るのです。現在、大体成功しているのは複合施設です。高松市も撤退した天満屋のデパートのワンフロアを買い取って、図書館の分室とデイケアサービスと子育て支援と市役所の出張所を設け、日曜でも住民票を取れるようにしました。それから、ワークショップスペースを作りました。そうすると、家族で来て、認知症のおばあちゃんを預けて、おじいちゃんは図書館で新聞を読んでいて、小さい子は子育て支援に行き、お父さんと小学生はワークショップを受けて、その間にお母さんは商店街で買い物してることができます。それを市場原理とも整合性が付くように、例えばそこに冷蔵機能付きのコインロッカーなどを置いておけば、お母さんが買い物を終えた後、お父さんが代わりにまた服を買ってくるようなことができ、消費も伸びるわけです。大体成功している例は、こういう施設です。

八戸はこれが成功したものですから、その向かい側に市直営の本屋を開きました。図書館ではなく、本屋です。先ほど言ったように、本屋は街の文化拠点です。それをわざわざ作りました。民業を圧迫しないように、とても特殊な写真集や文化人類学の専門書のようなものばかり売っています。市長がとても本好きなのです。民業を圧迫しないように、本屋を始める前に市内の小学校6年生全員に500円の図書カードを配りました。それから、仕入れなどは全部、民間の本屋に頼んでいます。これで人の流れが一変しました。今まで青森県は、弘前に紀伊國屋書店が1店あるだけでしたが、今は弘前や盛岡から八戸に本を買いに来ます。もちろん1回買いに来たら、本を買うだけではありません。周りにおしゃれなカフェなどもできてきて、八戸はものすごくにぎわっています。

13. 文化の自己決定能力

最後に、城崎国際アートセンターです。これはかつて城崎大会議館だった建物で、温泉街の一番端にありました。30年ほど前にできた収容人員1000人のコンベンションセンターでしたが、一度も1000人入ったことがありませんでした。最大が「新婚さんいらっしゃい」の公開録画の630人でした。最後の方は年間20日間ぐらいしか使われてお

らず、県が市に払い下げることになりました。払い下げるといえば聞こえはいいのですが、体のいいお荷物施設の押し付けです。「つぶして駐車場にでもするか」と言っていたのですが、市長が急に思い付いて、「劇団やダンスカンパニーに貸してはどうか」と言いましたのです。

私はそのときたまたま、全然関係ない文化講演会で来ていて、相談を受けました。これはものすごくダサい建物だったのです。「よほど頑張ってる工夫したら、どうにかなるかもしれません」ぐらいに担当者に言ったのですが、担当者が市民ミュージカルなどが大好きな方で、市長と中学・高校が同級生らしく、市長に「平田先生が、頑張れば大丈夫と言っていました」と嘘をついたのです。それで諮問委員にさせられて、本当に皆さんのご協力で、素晴らしい施設に作り変えることができました。1年目から330日稼働し、市議会でトイレトペーパーの予算をどうするかというのが問題になったぐらいで、世界中から二十数カ国、100件近い申し込みがありました。たった3年で城崎、豊岡の名前は、世界中のパフォーミングアーツの世界に広がっていきました。全て口コミで、広告は一切していません。

短期的な成果は問わないのですが、利用する方には必ずワークショップや公開リハーサルをしたり、学校に行っていたりしています。「このまちで世界と出会う」が標語になっています。豊岡はそれだけではなく、今年度から市内39校全てで、小学校6年生と中学1年生を対象に演劇教育を実施しています。これも地方創生の予算を多く使っていて、東京や大阪で豊岡市主催のワークショップを開催しています。豊岡市に来れば、これだけの教育政策と文化政策が保証されているので、安心して移住してきてくださいとお伝えしています。人口が少ないので、東京と遜色なく、そういった政策を全員が受けられるのです。東京以上の質の文化と教育が保証されています。安心してIターン、Uターンで来てくださいというのが、豊岡市の政策です。

豊岡は景気が良いので、雇用は既にあるのです。雇用がないから戻ってこないわけではありません。私は大学で17年教員をしていますが、私の教え子で「地元で雇用がないから戻らない」と言う学生は一人も会ったことがありません。口をそろえて「田舎はつまらない」と言います。つまらないから戻らないのであれば、面白い街、帰ってきたくな

る街、住むことに価値を見いだせる街をつくれればいいのです。これが豊岡の方針です。

富良野は、北海道最大の観光地です。ラベンダー生産が盛んで、香水の原料が人工香料にどんどん代わっていく過程で耕地面積が減っているのですが、これを見事に観光アイテムにしていきました。私は富良野でも、市内全部の小中学校で演劇教育を実施しています。1970年代までは普通の農村でしたが、富良野は面白くて、行くと15人ぐらいの子どもたちに対して30人ぐらい見学に来るのです。お父さんも農作業を休んで見に来ます。そのぐらい関心が高いのです。なぜなら、自分の子どもに農業を継いでもらいたいけれども、これからの日本の農業は高価格・高品質の付加価値で勝負していくしかないから、消費者のニーズをくみ取る柔軟性や何かを生み出す発想、表現力やコミュニケーション能力は農家ほど必要だと考えているからです。農業こそがクリエイティブ産業だという感覚を、自分たちの成功体験から非常に持っているのです。

一方、隣の芦別を見ると、大観音があって、日本最大の五重塔があります。中身は鉄筋コンクリートのホテルです。隣には三十三間堂を模したホテルがもう一つあります。全て北の京（みやこ）リゾート開発が運営しています。その隣には、第三セクターで破綻したカナディアンワールドが広がっています。私は真冬に富良野へ行ったとき、隣町ですから連れていってもらったのですが、人っ子一人通っていません。もう地獄絵図のようです。山の向かいは富良野ですが、富良野にこんな醜悪な建物は一つもありません。隣の美瑛町は、景観を守るために高規格道路の進出を拒否しています。便利になる必要はなく、景観で世界と勝負しているのです。何でこんなに違ってしまったのでしょうか。自分たちの価値は何で、自分たちの文化は何で、自分たちの愛するものは何で、そこにどんな付加価値を加えれば、よそから人が来てくれるかを自分たちで判断できないと、あっけなく東京資本やグローバル資本にだまされてしまうのです。

今は資本主義の黎明期ではないので、資本家が労働者にむち打って搾取する時代ではありません。文化力の差によって収奪・搾取が行われるのです。これを私は「文化の自己決定能力」と呼んできました。文化の自己決定能力はどこから来るのでしょうか。最初の話に戻ると、身体的文化資本です。

「ルノワールの30億円の絵を1枚買えば、たくさんお客さん来ますよ」と言って買ってしまった自治体はたくさんありますよね。一方、「ヤン・ファブルの作品とジェームズ・タレルの作品を組み合わせる参加体験型にしたらお客さん来ますよ」と言って造ったのが金沢21世紀美術館です。どちらがかっこいいですか。それは、リスクを取って自分の判断でつくるといことです。市場価格や偏差値という他人が決めた尺度で生きていくのか、リスクを取るけれども自分の判断で生きていくのか。そこが地域に問われているのだと思います。

今は公共事業をやっても地方は潤いません。現実に、道路や橋など必要な公共事業はあると思いますし、かつては経済波及効果もありました。昔は、従業員が商店街で買い物をしたり、スナックでお酒を飲んだりしたから地域が潤ったのですが、今は建設業にお金を投下しても、東京資本のショッピングセンターで買ってしまったり、スナックにも行きません。ファミレスで食べてしまうので、いくらお金を投入してもその地域でお金が回る前に、東京に吸い上げられてしまいます。だから、乗数効果はものすごく低くなってしまっています。

公共事業は、もちろん原材料費を全て輸入に頼っているわけですから、とても非効率です。そんなことは分かっているから、みんな地産地消と言い始めたのですが、食料品だけを地産地消しても限界があります。日本のエンゲル係数は二十数パーセントです。問題は、この可処分所得をどうやって地産地消させるかです。だから、大事なものはソフトの地産地消です。自分たちでつくり、自分たちで楽しみ、そこにどんな付加価値を持たせるか、そのためには付加価値を生み出せる人材をつくらなければなりません。

14. 賢治の祈り、東北の祈り

そう考えていくと、なぜ宮沢賢治が冒頭に紹介したような言葉を言ったのかが分かります。宮沢賢治は、こういうことも言っています。

「かつてわれらの師父たちは乏しいながらかなり楽しく生きていた。そこには芸術も宗教もあった。いまわれらにはただ労働が生存があるばかりである。宗教は疲れ近代科学に置換され、しかも科学は冷たく暗い」。

司馬遼太郎先生は生前、南部藩は徳川幕藩体制に組み込まれなければデンマークのような酪農国

家になれたのではないかと何度もお書きになっています。徳川幕藩体制は米本位制です。でも、当時の農業技術で岩手県で米を作ることはとても大変なことです。だから、5年に1回の凶作に見舞われたのです。かつての岩手県は、平泉にあればだけの金色堂を建てるほどの富を持っていたのです。しかし、中央集権に組み込まれる中で、それがどんどん収奪されていきました。

今回の東日本大震災で何より私たちが痛感したのは、東北がいかに東京を下支えしてきたかということです。それはエネルギーやサプライチェーンだけの問題ではなく、やはり人なのです。明治・大正の日清・日露戦争の時代は一兵卒として、大正・昭和の時代は満蒙開拓の尖兵としてです。私の母のすぐ上の兄は、14歳で満蒙開拓青少年義勇軍として、鉄砲を担いで開拓に行きました。そして戦後は出稼ぎ集団就職の供給源として、東北は常に人を出してきたのです。そして、東日本大震災が起きました。だから、もう付加価値を付けられる人が払底しているのです。

宮沢賢治は、私のふるさと・駒場の農学校で農業を学んだのですが、最先端の農業技術を岩手の子どもたちに教えることで、岩手の農民を飢餓貧困から救おうとしました。しかしあるとき、これだけでは駄目だと気が付いたと思うのです。当時、米は商品作物でしたから、たくさん取れば価格が下がり、取れなければ貧困になります。だから、自分たちで何を作り、どう売っていくかを自分たちで決定できなければ、どんなに収穫を増やしても、いつまでたっても岩手の農民は豊かになれないことに、あるとき宮沢賢治は気が付いたのだと思います。

だから、これからの農民たちは、一人一人が芸術的なセンスを持たなければなりません。今日の文脈でいえば、身体的文化資本を蓄積しなければなりません。100年前に宮沢賢治はそのことに気が付いていたのです。人口減少対策は、喫緊の課題です。これを誤ると、本当に日本の多くの自治体は滅びていってしまうと思います。そのとき大事なのは、今までとは次元の違う、経済政策だけではない、人間の心に根差した政策なのではないか。そのときに文化政策が非常に大きな役割を果たすのではないかと考えています。駆け足になってしまいましたが、これで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございます。